

**ポイント**

- 内閣府の青年国際交流事業の見直し(PDCAサイクル)のため、外部有識者の視点で成果検証や今後の事業の在り方の検討を行ったもの。(座長: 牟田博光東京工業大学名誉教授)
- 成果検証は、平成27年度以降に充実強化した「世界青年の船」と「地域コアリーダープログラム」を取り上げた。
- 今後の事業の在り方の検討では原点に立ち返り、①グローバル社会にあるべき人材(育成すべき青年像)、②必要な事業構成(カリキュラム、プログラム、募集方法等)を論点とした。

**今後の事業の在り方**

**育成すべき青年像～以下の能力を備えた人材育成を目標とすべき**

- ◆基礎的な知識、学力、情報リテラシー ◆理論的に意見を戦わせるスキル
- ◆自分に目標を課し、実行する力 ◆相手の視点で問題解決を図る能力
- ◆自分の活躍の場を探ることができる力 ◆経験を沈澱させる力
- ◆当事者意識と意思を示し、周囲がついてくるような力 ◆人脈を作る力
- ◆グローバルな課題を日本の個別課題としても認識できる力

**カリキュラムの在り方～上記青年像に基づくカリキュラム構成上の重点**

- ①価値観や公平性をグローバル文脈で客観的に論じる能力の付与
- ②ディスカッション能力の付与(情報選択、考えの整理、説得力)
- ③目標や課題の言語化と対応策の検討の促進
- ④専門的知識の付与、日本の良い点を発信できるスキルの付与  
※なお、内閣府担当職員及び青年指導に当たる者が、高い専門知識や人材育成の知見を持つべきことは言うまでもない。

**プログラムの在り方～上記カリキュラムでのプログラムを構成上の重点**

- ①青年個人の目標の明確化
- ②各人が活躍できる多様な場の提供
- ③ホームステイの安全確保、心構えづくり
- ④重点を絞り、詰め込みを回避
- ⑤研修講師の質の確保

**【団長経験者からの意見】**

- 達成度の測定を検討すべき
- 広報に工夫が必要
- 偏りのない幅広い参加層を得る工夫が必要
- ディスカッションの目方や内容の質の向上が必要
- 団長には団員の理解を深めることのできる知見や語学力が必要

**【日本人参加青年からの意見】**

- 過去の参加青年から情報を得られる機会が必要
- 帰国報告会の広報に工夫が必要
- 派遣先国について事前に学ぶ機会が必要

**青年国際交流事業の意義→今後望まれる方向性**

1. 国事業としての特色 → **今後も活かす**
2. 日本を外から見る能力(強み、批判、発信) → **一層の充実**
3. 有為な人材の育成に貢献  
→ **2020オリパラ機会の活用、地域の受入れ中核人材の育成**
4. 事後活動の実施 → **実態を把握し事業に反映**
5. 閉鎖空間での人間対人間の交流
6. 参加者のフォローアップ → **一定年ごとに実施**
7. 広報 → **マーケティングを意識し、訴求対象ごとの広報。**  
**また、修了証に具体スキルを記述することも一案。**

成果検証

平成28年度世界青年の船

◆優れた点

「コースディスカッションを中心とするプログラムのテーマ設定や、参加青年が主体的に行うPYセミナー、スキルセミナーといった能動的なアクティブ・ラーニングを中心とした構成であり、高く評価できる。」

- ・ディスカッションプログラムの工夫(絞ったテーマ、事前課題の付与、実演重視)
- ・閉じた空間で自分を見直す時間を持ち、自信を持つ・無くすといった学びを経験
- ・ディスカッションコースで得たスキルが委員会活動で役立つなど総合的な構成
- ・経験が困難な事項を他者から間接的に経験できる機会
- ・スキルセミナーにおける自主的な企画経験や学び合い経験

前頁「在り方」では、カリキュラム①、②、プログラム②、④が既に該当

◆改善が望まれる点

「参加青年に対するサポート体制や多様な参加青年の確保のための企業へのアプローチなどの課題がある。」

【育成面】

- ・ナショナルリーダーに、国籍を超えた斜め上関係でメンターの役割を付与する
- ・日本人参加青年に、参加国に関する事前学習を課して研修成果向上を図る
- ・日本人参加青年に、本音や感情を出す訓練をさせる
- ・過去の事業で蓄積された異文化環境下での生活メソッドを文書化して共有する
- ・システム等無形の物を説明できる人材を育てるアクティブラーニングを検討する

【広報面】

- ・多様な人材の確保のため、事業による人材力の強化を企業に分かりやすく可視化した企業向け広報を検討する

【効果検証面】

- ・参加者の満足度調査結果を、個人の要素にまで踏み込んで分析し、事業の改善を図る
- ・どのような外国青年を参加させることが日本人青年の育成に資するのかを検討する

平成28年度地域コアリーダープログラム

◆優れた点

「優れている点として、参加青年が専門知識及び実務経験を持つ社会人中心で構成されていること、能動的なアクティブ・ラーニングを行うプログラム、分野横断的な連携、地域の共生社会実現に向けた課題の発見・設定及び具体的な課題解決のための手法の模索及び実践が挙げられる。」

- ・専門分野に特化した講義、ディスカッション、視察等による深い学び
- ・日本の社会システムの良さと課題の再認識
- ・団目標及び個人目標により目的意識を明確化し、課題の客観視、対策検討、解決に向けた取り組み(職場での実践)に導く総合的な構成
- ・高齢、障害、青少年の3分野の実務者による横断的連携からの気づき
- ・本事業は国連の持続可能な開発目標(SDGs)に係る国内対応の1つとも捉えられる

前頁「在り方」では、カリキュラム②、③、④、プログラム①、④が既に該当

◆改善が望まれる点

「課題としては、外国参加青年の(日本青年育成のための資源としての)活用、企業へのアプローチなどが挙げられる。」

【育成面】

- ・派遣と招聘のリンク性を向上させ、外国青年を日本青年の能力向上のための資源として役立てる(例:NPOマネジメントフォーラムへの参加を派遣青年に義務化)

【広報面】

- ・当事業に社員・職員を参加させることの企業側メリットを可視化し、企業研修の一環としての参加促進を図る

【対象面】

- ・現行3分野に拘らず、社会的に周辺化される人々を巡る課題など新規分野を検討
- ・対象国を事例先進国に限定せずに検討することで、力を生かせる点の発見や新しい発想につながる可能性